

縄文時代における石器集中部の検討

——石器製作址と立地について——

本 橋 恵美子

要旨 縄文時代の石器集中部は、石器製作址の場合もあれば廃棄場である場合、石器製作で生じた「ゴミ」を廃棄場に捨てた場合、自然的営為によって偶発的に集中した場合が考えられる。これらの識別は石器の出土状態、分布による検討は言うまでもなく、石器そのものの分析だけではなく、石器集中部が遺跡のどこの場所に位置するか、つまり、地形的な立地や集落における古地に着目することが重要である。

本稿では、遺跡の発掘調査において現位置記録の重要性を改めて説き、集落研究あるいは遺跡構造解明の観点から石器集中部の検討を行なった。

1. はじめに

平成元年に練馬区愛宕下遺跡において、低湿地にかかる微高地縁辺部で、黒曜石製の剥片・砕片の集中部が確認された。調査区中央には、富士黒色帯（FB層）が堆積する谷がはしり、東南部に微高地が形成されている地形である。調査当初では、縄文土器を包含する褐色土層は縄文時代遺物包含層と認識していたが、中世や近世の陶器類が出土したため二層にわけ、上部を近世、下部を縄文時代の所産とした。石器集中部はこの層離面に上下して分布しており、しかも分布域の中央から須恵器が1点出土しており、石器集中部は再堆積層中に存在していることがあきらかとなった。しかしながら、石器の中には石鏃片が含まれており、製作に関係する遺物のまとまりである可能性が示唆された。

ところで、縄文時代の石器研究は形態や機能を重視するあまり製作技術や石器製作址などの研究がなおざりにされてきた感がある。堅穴住居址や土坑などの遺構にのみとられ、遺構にともなうあるいは重複する遺物の出土状態からの検討がおろそかになってはいないだろうか。遺跡における遺構群は遺物の集まりを含めて、人間活動の繰り返しあるいは重複の結果であり、人間行動の復元もしくは集落の復元は厳密に時間的な同時性を吟味した上で初めて可能となろう。遺跡の発掘調査において、遺物を遺構ごとやグリッドごとの一括で取り上げてしまうことで、本当の意味での遺構の時期設定や廃棄状態や製作址などを明らかにすることができるであろうか。緊急調査による時間的や費用的な制約に大きく発掘調査が左右されるのは仕方ないとしても、失われる遺跡におけるデーターとして遺物の現位置記録の重要性を今一度考える必要があろう。

本稿では「遺物のあつまり」がどのように形成されたかを検討するとともに、遺跡立地の点か

ら石器製作址を検討し、遺跡構造にまで追求することとしたい。

2. 石器集中部研究の動向

旧石器時代の石器がまとまって出土し、住居と関係のある遺構であるという認識を指摘したのは芹沢長介で、1954年既に問題提起を行っている。1960年代末から1970年になると、石器集中部について「遺棄」や「廃棄」が問題とされ、その性格づけを行い、旧石器時代の遺跡を構造的に捉えようとした。鎌田、安藤や岡村らによって「遺棄されたブロックの究明」や石器集中部の埋没後の移動が問題とされた。遺跡の構造的究明が始まったのはこの頃からで、戸沢充則らは埼玉県砂川遺跡の石器ブロックを接合資料や個体別資料の分析を駆使して人間行動を復元しようとした。また、小林達雄らは東京都野川遺跡で、石器の器種を中心としてセトルメント・パターン分析を行っている。これに対して、矢島國男は各々の石器ブロックが「『場』を共通の指標とする複数の（異次元の）行為群複合体として評価することができる」と主張すると同時に、「各ブロックの石器組成を直接的に機能類型で捉えてしまう方法に警鐘を鳴らしている。1980年代になると、石器製作の実験的方法によって石器がどのように集中する、あるいは埋没後に遺物がどのように動くかが検討される研究が盛んに行われるようになった。阿子島香は実験結果から、石器製作者の姿勢によって石器の分布範囲が異なる、つまり、「立った場合、中心密集は弱くなり、全体に広い範囲に散る」ことがわかり、ニューカマーらの結果を追認することになった、と述べる。御堂島正・上本信二は石器集中部が自然環境の中でどのような移動を示すか実験を行い、「斜面ではリルの形成によって移動し、平坦面では微隆状によって生じる地表流水が微細な遺物の移動をおこす」ことが判明し、「石器製作時に生じる微細なチップ類は降雨にともなう地表流水によって原位置が失われる可能性がある」結果を提示した。これは、石器集中部に微細遺物が存在しなくても石器製作址である可能性があることを示している。また、佐藤宏之は先の両方の視点、石器製作実験と自然環境における遺物の移動について検討している。佐藤らは大小・軽重に関係なく「移動量にバラツキが大きい」ことに注意を促している。また、遺物の移動には「地表面環境の復元」が重要であることを指摘し、「遺跡形成環境に応じた遺跡形成論的視野」の必要性を説いている。一方、このような実験結果とは別に、遺跡の石器集中部の微視的な研究があげられる。阿部祥人は東京都はけうえ遺跡での微細遺物の分析から、微細遺物は「石器の使用時に生じたものというより、むしろほとんどが製作時に飛び散ったものである可能性の方がずっと高い」とし、二つの解釈を行っている。第一に「その場で石器作りが行われた跡」、第二に「他の場所で石器作りが行われた石器作りの副産物をまとめて捨てた所」を想定する。そして、「チップ類集中部においては、これらと同材質の完成品や加撃具と思われる石器が発見される場合が多い点は、その場自体が石器製作の場であり、副産物のみが移動したという状態ではない」ということを示している、と言える。チップ類の密集部は石器作りの具体的な場所である可能性が高いのである。」と主

張する。久保田正寿は縄文時代の東京都白丸西の平遺跡で、チャートの微細遺物の分析を行った。二つの石器集中部から得られた遺物を「A類 一般的な石片」、「B類 ブロック状をなすもの」、「C類 針状をなすもの」にし、遺跡からの微細遺物と石器製作の実験結果を照らし合わせ検討した。石器製作は、チャートによる剥片と石鏃をそれぞれ行ない、遺跡の石器集中部が「フレイク製作をおもに行っていた傾向が指摘」でき、「フレイクをハンマーにより整形する石器づくりも考慮する必要」性も説いている。微細遺物の分布状態や、採集した遺物と実験結果で得られた遺物の図が不明なので先の分類における妥当性については疑問が残るが、遺物の分析に実験的方法で考察した研究姿勢は高く評価されよう。ところで、石器集中部の解釈として、岡村は「遺棄」を「製作・使用の場に置き去る」とし、「放置・安置・隠蔽されたものが偶然に残された場合、その遺棄された状態を把握することによって、居住の場、石器製作など各種の場、墳墓などが浮き彫りにされることを願」い、もし「遺棄の状態が皆無であれば、『原位置論』はおろか遺跡の構造的な理解さえもきわめて困難になる」と主張する。また、「廃棄」を「不用なものをまとめてある場所に捨て去る」と規定し、「廃棄されたものは、単位集団がある期間に遺跡に残した生活痕跡の総体をもっともよく表すと評価できる。」としている。「遺棄」と「廃棄」の問題について梶原洋は、「剥片剥離作業を中心とした廃棄、遺棄の区別の他に、それらによって作られた使用の観点を取り入れることが重要である」とし、「石器のまとまりは、使用の結果を強く反映しているが、厳密な意味で、遺棄か廃棄かのいずれであるとは決定できない」と結論できる。この指摘は重要で、遺跡に残された石器集中部の解釈は一元的でない可能性を匂わせる。梶原は「石器のまとまり」についての解釈には6通りの仮説を立てている。「1. 自然現象による偶発的なまとまりの形成」、2. 「その場があるまとまりを持っている場合」である「廃棄」、3 「剥片剥離、石器製作作業の後にその場にそのまま残される」、4. 「将来の使用に備えてある場に貯蔵されている場合が想定される」「保持・隠匿」、5. 「埋納・安置で、墓などに副葬された状態が想定される」、6. 「上述の二つ以上の原因が重複して作用した場合」、である。これら仮説はかなり有効に考えられるが、阿子島が「廃棄」「遺棄」は対立的にとらえられるべきものではなく、ある時間の範囲にその空間で生じた一連の行為の圧縮があることの基本的な視座をもつことが重要であり、原因は複雑であり、単一要因に帰することができないのが原則であると指摘する点は傾聴すべきであろう。そこで、本稿では先の解釈を念頭にいれつつ、微細遺物と従来あまり議論のなされなかった遺構立地の観点から分析を行なうことにする。

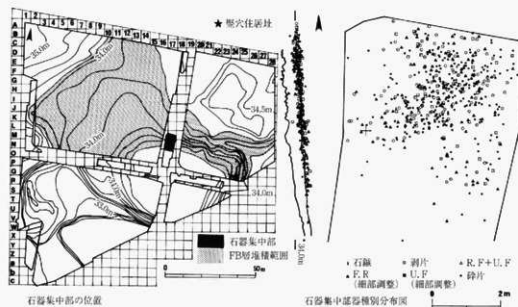
3. 遺跡の検討

(1) 愛宕下遺跡

東京都練馬区に所在する遺跡で、白子川左岸の低湿地帯を含む遺跡であり、縄文時代前期の堅穴住居址が数軒確認されている。遺跡の微地形は、調査区中央の標高34.0m以下の谷部にF B層

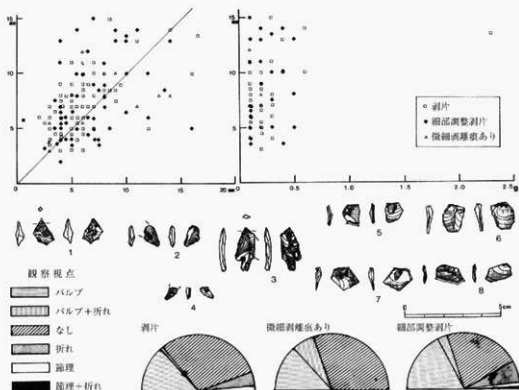
の埋没土が堆積し、南側に泥炭層が形成されている。第1図のO13グリッドあたりからO20グリッドの南側は狭い微高地が存在し、周囲を埋没谷と泥炭地に囲まれている。この微高地の東斜面に竪穴住居址が1軒検出されている。時期は不明で、覆上中の土器には早期後半もしくは前期前半が含まれていた。時期不明の柱状のピットがない竪穴住居址がE3・E4・F3グリッドで確認された。前期前半の竪穴住居址は西側部分で、先の微高地の北側縁辺部で、埋没谷にかかる斜面土である。

遺跡における風成層の基本土層は、表土の第1層、暗褐色土の第2層、FB層と考えられる黒色土層の第3層である。このうち、第2層は下層がやや黒い色調で、締り・粘性が強い。上部を第2a層、下部を第2b層としたが、マトリックスでの識別はつけづらく、安定して堆積している部分では、先の視点で分けられた。第2a層では中世から近世の遺物が出土し、第2b層では縄文時代の遺物が多数出土している。石器集中部は層位的には、この第2a層と第2b層の層離面に最も高い集中度を示している。第2層が北に向かって緩い傾斜を呈しており、石器もこの傾斜に重なるような分布を示している。平面の分布範囲は約4m四方に広がる。石器は黒曜石製の剥片・碎片を中心として508点を数える。黒曜石以外の石材は36点で、チャート・砂岩・ホルンフェルス・粘板岩・安山岩・片岩が含まれている。黒曜石は三つの母岩に分けられるようであるが、1cm以下の小片が多いため定かではない。石器の中には石鉄5点、剥片235点、碎片268点で、剥片のうち細部調整のあるもの（R,F）は106点、微細な剥離痕が観察されるもの（U,F）は28点、細部調整と微細な剥離痕をもつものは1点である。石鉄と判断したものの中には、脚部や先端部



第1図 愛宕下遺跡

の破片面に先端部をもち、挟り部のような調整が表面にみられ、周辺に細かな調整がみられるもので、表面の脚部が割れた碎片と解釈できるものを含む。ここで、碎片としたものは重さが0.1gで、バルブの残されていない、剥離の方向がわからない小片である。これらを以下のような三通りの視点で観察した。バルブの有無、折れ面の有無、節理面の有無である。結果はバルブの残されているものが細部調整のあるものと微細な剥離痕があるものが多く、折れのみみられる剥片と細部調整剥片にしかみられなかった。バルブと折れ面をもつものはいずれも1/3の割合を示し、特に細部調整剥片が多い傾向がある。節理面が残されているものは微細な剥離痕があるものでは認められなかった。ところで、剥片に残された細部調整や微細剥離痕とバルブの位置関係については、いくつかのパターンがみられた(第2図)。すなわち、前者については、Ⅰ類;バルブのある位置に背面から調整がなされているもの、Ⅱ類;Ⅰ類に加え、背面からさらに一方の側縁に調整が加えてあるもの、Ⅲ類;バルブのある位置とは逆の端部に背面から調整がみられるもの、Ⅳ類;Ⅲ類と同じ位置で、腹面から調整が加えられるもの、Ⅴ類;一側縁に背面から調整が加えられるものに分けられる。後者では、①類;バルブの下端部にある折れ面に微細な剥離痕が観察されるもの、②類;打面に微細な剥離痕が残されているもの、③類;②類に加え、一側縁にも微細な剥離痕が観察されるものである。細部調整のある剥片で、微細な剥離痕が残されている唯一の



第2図 愛宕下道跡(2)

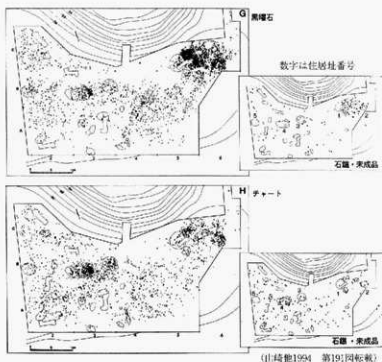
もので、Ⅰ類で①類に相当する。もちろん、バルブの残されていない細部調整剥片で、ノッチ状に調整が入っているものや、バルブのない剥片の端部に微細な剥離痕が観察されるものも存在する。細部調整剥片では、Ⅰ類は7点、Ⅱ類が2点、Ⅲ類が13点、微細な剥離痕があるものでは、①類7点、②類が1点、③が1点である。ノッチ状が1点である。大きさについては、ともに偏りは見出せない。長幅比では、幅より長さの値の大きいものが多いようであり、重さでは長さが15mm以下で、おもさが0.5g以下のものが多い。0.1g以下のものは、各々剥片で約1/6、細部調整剥片で約1/2、微細な剥離痕があるもので約1/4である。

石器集中部から須恵器が出土したことと、分布状態が極めて自然地形に則した在り方を示しているために、原位置を留めた石器製作址とは判断しがたい。しかし、石器集中部が恐らく谷部にかかる斜面と湿地に近い立地であるため、河川の氾濫による自然的営為の影響を受けてはいるものの、本来的には石器製作址に関係する遺構であった可能性は捨てきれない。さらに、石鏃製作途中に欠損したものと解釈するならば、また、バルブの残されている多数の剥片や細部調整のある、あるいは微細な剥離痕のある小片が集中して出土した点からも石器製作址である可能性を高めている。

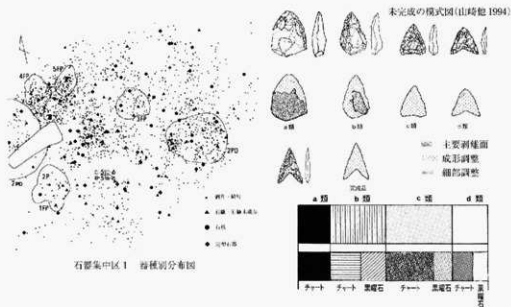
(2) 神明山南遺跡

東京都東久留米市に所在する遺跡で、荒川に注ぐ落合川右岸台地上の、現在でも水量が豊富な前沢湧き水群の西に位置している。竪穴住居址が早期1軒、前期3軒、中期1軒が検出された。石器集中部は二箇所確認され、住居址の切り合い関係などから、前期のものと考えられている。前期花積下層式期の竪穴住居址3軒が東西に並び、報文では東から3号、4号、5号と呼称されている。石器集中部は、黒曜石主体のものが東側台地縁辺で、中期中葉の竪穴住居址に切られる形で一箇所、もうひとつはチャートが多く、4号住居址に西側に隣接する位置に確認された。前者を「石器集中区1」、後者を「石器集中区2」としている。

石器集中区1は、10m×10mに2,377点が分布しており、このうちより密集している箇所が3m×3m（a集中）と2.5m×2.5m（b集中）にみられる。微細剥片・碎片が92%を占める。b集中はa集中の位置にある。石質別では、黒曜石が66%、チャート19%、その他15%である。報文によると黒曜石では、a集中は「微細剥片・碎片の核となるような集中箇所」で、b集中は「比較的少数の母岩をもつ可能性が高い」とある。黒曜石で0.1g以下が80から90%を占め、チャートが73%である。また、同一母岩と考えられるものは黒曜石で数個体、チャートでは接合資料を含め17点存在する。未成品は78点で、内訳は黒曜石65.3%、チャート30.8%、安山岩が3.9%である。ところで、未成品について、報文では以下のように四つに分類している（第4図・280頁、山崎他1994）。「a類：素材となる剥片の一部に加工を行ない、形状を整えているもの。b類：ほぼ目的の大きさに加工したものの、一部に素材の形状が残っているもの。c類：石鏃の形状には加工できなかったもの。d類：細部調整途中のもの。」とし、a類29点、b類50点、c類61点、d類32点を数え



第3図 神明山南遺跡



第4図 神明山南遺跡(2)

る。完形品については、「形状的にはほぼ左右対称で、側縁・基部の細部調整が行なわれているものを原則的に完成品とした。すなわち、平面形では、先端と基部中央に位置する安定した形状を呈するもの。」と概念規定している。

石器集中区2は5m×7mの範囲に分布しており、断面形ではレンズ状を呈している。4号住居址の覆土上面に分布することから、住居が廃棄された後に石器集中跡が残されたもの。石質別ではチャートが680点、黒曜石196点、その他233点である。剥片・砕片が93%、未成品38%である。0.1g以下の微細遺物は64.8%、0.11から1gが23.3%、1.1g以上が11.9%である。微細剥片・砕片のほとんどが先のa類とb類であるがc類では、石器集中区1で大きさが0.5cmから1.5cmであったのに対し、石器集中区2では0.5cmから1.5cmであったり、石器集中区2では0.5cmから3cmのばらつきがみられる。チャートの石礫素材剥片として、「剥片に折断または分割を示す資料が存在」、それらの資料は、形状がほぼ二等辺三角形を呈し、一端に鋭角（先端部）をもつが、その鋭角部が剥片剥離後に片方または両方の側縁を折断（分割）する点に特徴がある。その技法を表付ける接合資料や母岩資料が存在する。

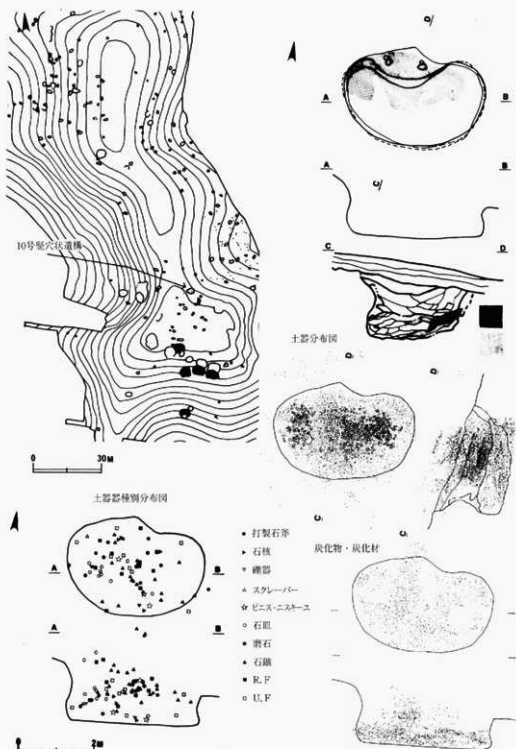
石器集中区の二箇所とも、重複関係から花楸下層式期の所産である可能性が高く、同じ時期の堅穴住居址である3軒との位置関係をみると、黒曜石の石器集中区1は台地縁部に位置し、チャートの石器集中区2は住居址近くに存在する位置である。

未成品や接合資料を含めた母岩資料が複数存在することや、0.1g以下の微細剥片・砕片が80%を越える点から、石器集中区1は黒曜石の、石器集中区2はチャートの石礫製作址であった可能性が高い。

（3）三矢田遺跡

東京都町田市に所在する真光寺・広袴遺跡群に含まれる遺跡で、調査区は二つの微高地をもつ台地に位置する。堅穴住居址が12軒検出され、うち、7軒が前期後半諸磯b式期である。これらは南側の台地に分布しており、その微高地状の高まり北側斜面に遺物6,800点が集中する10号堅穴状遺構が存在する。

10号堅穴状遺構はソウ豆状の平面形態で、規模は2.6m×3.7m、深さ1.6mを測る。断面形は東西方向でフラスコ状を呈し、南北方向で南側の底面がややハングした形態である。覆土中の土器では、前期後半が最も多い。覆土の北側に焼土塊を含む層が堆積している点が特徴的で、覆土は報文によると4層に分かれる。第5図の土層断面図は、報文の断面に先の4層を投影させたもので、土層注記は報文の記載をまとめたもの。壁際の3層はローム層の崩落土であるという。遺物分布は、ほぼ覆土の堆積状態に対応し、上半の分布は西側からなだれ込んだような状態である。さらに覆土の上面に土器が集中している。剥片や砕片を含めた石器の分布においては、平面ではほぼ中央に0.5m×1mの範囲に、断面では2層下面に際立った集中がみられる。石器の分布は遺構中央部を中心に、断面では4層上面および2層下面での集中がみられ、石器においても覆土上面で



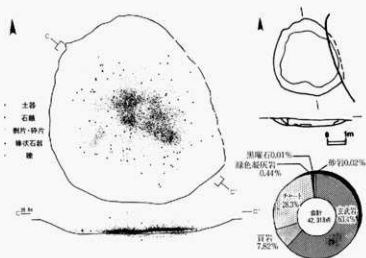
第5図 三矢田遺跡 10号竪穴状遺構

は西側から東側に傾斜した分布状態がみられる。黒曜石とチャートによる分布の大きな差異は見出せないが、やや黒曜石のほうに集中する傾向が認められる。なお、炭化物・炭化材の分布は、平面ではほぼ全体に分布するが、断面では底面を中心に2層のほぼ中央に集中がみられる。炭化物のなかにオニグルミが多く含まれていた。石器の器種は多岐にわたる。微細遺物はウォーター・フロンテーション・セパレーションにより、31,565点が回収された。このうち、石材がわかる10,269点の内訳は、黒曜石が8,013点、チャートが2,243点、その他が13点である。黒曜石でみると、長さが2.6mm～5.0mmのものが4,823点で60%、2.5mm以下が1,837点で23%、5.1mm～7.5mmが914点で11%、7.6mm～10.0mmが4%を占め、25.0mm～30.0mmが3点で最大となっており、いかに微細遺物が多いかがわかる。10号堅穴状遺構の遺物分布は、覆土下面に炭化物・炭化材が集中していることから、本来は植物種子を貯蔵したものが、土器や石器の廃棄が行なわれたゴミ穴に利用されたものと考えられる。遺物が断面分布においてレンズ状の堆積は、貯蔵穴廃棄跡に捨てられたものあるいは自然に流入したものであり、遺構が立地する斜面の下方向である西側から遺物が流れ込んだような分布は、地形的な状況から自然的な営為によるものではなく人為的な廃棄と考えたほうが妥当であろう。覆土上面の遺物包含層中にみられる遺物集中は、遺構の覆土が埋まった状態においてもゴミ捨て場としての機能があったことが想定される。特に注目すべき点は、報文によると微細遺物の分布から以下二点のことが明らかになったという。すなわち、第一に「他所での石器製作後、清掃などによってひと纏まりにした副産物を一括廃棄した二次的な集積結果を示して」おり、廃棄方法として、「布などの敷物の上での石器製作が想定され、敷物ごと持ち運び廃棄されていたものと思われる」と判断している点である。第二に微細遺物は「石鏃の押圧剥離による二次加工の結果生じたものであり、石鏃製作工程の最終的な段階を示す資料群であると解釈」している点である。確かに、廃棄された状態であるにしろ、微細遺物が多い点は石器製作に関係のある遺物である点、未成品がみられない点から何を製作したかの特定は難しいが、小型の石器である石鏃が比較的目立つ点、さらに点で取り上げた剥片破片の分布が、平面的にも断面的にも極めて狭い範囲に集中している点から、先の解釈は支持することができよう。10号堅穴状遺構は、貯蔵施設として機能していたものが廃棄され、自然的営為や人為的廃棄が繰り返された結果、38,000点を超える遺物が集中した痕跡となったのであろう。

(4) もみじ山遺跡

東京都練馬区に所在する遺跡で、先の愛宕下遺跡から約1km北の台地縁辺部に位置する。石器集中部は10号土坑覆土中に検出された。第6図をみると平面での分布は土坑の中央に分布しており、最も集中している部分で二箇所、それぞれ0.5m×1m、1m×1.5mに認められる。断面での石器分布は、土坑のほぼ底面に集中しており、覆土2層下層にピークがあり、3層下面から草創期の押圧縄文の小片が出土したことから、石器集中部の時期は草創期の所産である可能性が高い。石器の総点数は57,904点で、このうち、ウォーター・フロンテーション・セパレーションで

42,313点の微細剥片を採取した。器種別にみると、破片が最も多く56,115点で97%を占める。次いで、剥片が1,683点、尖頭器1点、石鏃47点、細部調整剥片(R.F)が51点、棒状石器6点、敲打器1点である。ただし、ウォーター・フロンテーション・セパレーションで採取された微細遺物の中には、細部調整剥片や微細剥離をもつ剥



第6図 もみじ山遺跡 10号堅穴状遺構

片が存在する可能性がある。なお、微細剥片の重量については不明であるが、2mmメッシュのフルイを使用したことから、恐らく2mmより小さい破片は採取できなかった可能性がある。石質別には、玄武岩が最も多く26,825点で63.4%、チャートが11,978点で28.31%で、頁岩が3,308点で7.82%を占め、緑色凝灰岩が187点、砂岩が10点、黒曜石は僅か5点にすぎない。また、石器のなかには石鏃の未成品や素材剥片の可能性があるものが出土していることなどからこの遺構が、石鏃製作所である可能性が高い。

草創期の遺構が本址のみなので、集落と石器集中部の関係については不明であるが、この石鏃製作所が川や低湿地をみおろせる台地縁辺部に立地する点は注目される。

4. 石器集中部の解釈

石器集中部が廃棄であるのか石器製作所であるのかの判断は、単純ではない。まず、石器製作所という認識は、微細遺物や未成品、同一母岩が集中して分布する点においてなされる。これが、石器製作後に生じた「ゴミ」が廃棄されたか否かは、出土状態による他はない。つまり、石器集中部に混じって石器製作に関わりがないと考えられる土器などが存在する場合は廃棄後、つまりゴミ捨て場の可能性が高いと判断されよう。石器集中部の解釈には以下のようなパターンが考えられる。

- 石器製作所として残されている場合。
- 石器製作所の「場」がゴミ捨て場として利用された場合。
- 石器製作所を別の場所で行ない、この時に生じたゴミを捨てた廃棄場所。

D、自然的営為によって偶発的に生じた場合。

この他、石器集中部は梶原が指摘しているように「貯蔵」や「埋納・安置」が考えられ、微細遺物が密集している石器集中部については、これらの解釈は除外して考えられよう。Aの場合は、石器製作に直接関係した遺物の集中に限られる可能性が高い。Bの場合は石器製作に関わりのない遺物、土器なども多量に集中している可能性がある。Cの場合、石器分布の集中の割合が高い可能性がある。BとCの識別は、微細遺物の在り方や分布状況が決め手になろう。つまり、Bの場合、剥片や砕片などの微細遺物の分布に偏りが看取できる場合がある。たとえば、愛宕下遺跡ではDの可能性が存在するものの、石器製作に用いられた可能性のある棒状鏃や敲打器こそは存在しないが、土器が集中して出土していない点や石鏃の未成品や折損品が含まれていることから石器製作所であった可能性が推定できる。ただし、石器製作がその場所で行なわれた後、自然現象によって擾乱された可能性が高いのである。低湿地や谷の端に残された場所から考えても、遺構の遺存状態としては極めて不安定である点からも自然的営為は大きいものと考えられる。Aの典型例として神明山南遺跡ともみじ山遺跡があげられる。神明山南遺跡では石器集中部に黒曜石とチャートの石材による明確な分布の差異がみられ、母岩資料や接合資料、素材剥片や微細遺物によって石鏃製作所であることの根拠を明確に残していると考えられる。また、石器集中部1は集落端で、台地縁辺部に位置する。もみじ山遺跡は、引用した事例分析では草創期後半と最も古い、凹地底面になりに密集して分布しており、狭い範囲に微細遺物とともに棒状鏃や石鏃やその未成品が存在することから石器製作所と判断できよう。この場合、遺跡の遺存状態が良好でないためと、同じ草創期の遺構がみられないことから、微地形や集落内における位置づけについては不明である。Cの廃棄の場合、特に、土坑などの落ち込みの利用方法として、三矢山遺跡の場合のように覆土断面の遺物断面の遺物分布から、石器や微細遺物とともに土器が層にともなって出土していることから、繰り返し廃棄が行なわれたゴミ捨て場であると推定できる。ここで、問題になるのが微細遺物で、石器製作を行なった残屑を別の場所に捨てるということは、石器製作の時点で既に布などの敷物を敷いて作業しなければ不可能であろう。つまり、「石器製作」の時点で既に「捨てる場」が意識されていた点で、集落内での場所の選択が既に行なわれていた可能性がある点を強調したい。

集落内での「石器製作場」の選択、つまり「石器製作所の立地」については、堅穴住居址や他の遺構との同時性の問題が存在するが、愛宕下遺跡では石器集中部は谷にかかる斜面地で、集落の端に位置していた可能性があり、神明山南遺跡では集落の端と内に位置していた可能性が推定できる。佐藤は遺物の移動という観点から「地表面環境の復元」が重要であると説くが、石器集中部が生じてから自然的営為によって、どの程度移動するか、あるいはどのように移動するかを知るには、逆に石器集中部が石器製作によってどのように残されるかを検証することになろうし、さらに遺跡に残された石器集中部の性格を解釈する助けとなることは間違いない。旧石器時代においては風雨のみならず、凍結や霜柱の影響が大きく、石器集中部における自然的営為の働きが

けは甚大であったに違いない。縄文時代にあつては温暖な気候であり、本稿で引用した事例は主に前期であることから、より温暖であった時期であり、旧石器時代に比すれば凍結や霜柱による影響は少ないと考えられる。このように遺物移動の点から、石器集中部の環境復元は重要であるが、さらに縄文時代では集落における位置、縄文人の集落空間のレイアウトについて検討する必要がある。つまり、石器製作はあらかじめ選択された場所で行なわれていた可能性があり、また廃棄場の集落内での位置についても、石器製作址と相関性がある可能性が看取できる場合が考えられる。石器集中部の解釈を巡っては、今後、微細遺物の検討だけでなく、石器集中部の石器や剥片の分析、実験的考古学的方法による事例の蓄積が重要であることはいまでもないが、石器集中部の立地については事例の増加とともに、同時性の問題を含めて慎重に検討しなければならない課題であろう。重ねて、廃棄後の住居址の窪地を利用して、石器製作の場あるいはゴミ捨て場として存在していた可能性もある点も強調したい。

5. おわりに

石器集中部の検討は、微細遺物の分析や石器製作の実験的方法によって、次第に明らかになりつつある。しかしながら、旧石器時代の遺跡については、多くが遺物分布として遺構であるため、原位置記録が必然的に行なわれているが、縄文時代の遺跡については堅穴住居址や土坑などの調査に迫られ、遺物の原位置記録ができない現状が多い。原因者が民間事業による緊急調査でやむを得ない場合も多いであろうが、遺跡全体の遺物出土状態の記録がなされないのであれば、せめて石器や微細遺物が多いと判断されたならば原位置を記録する必要がある。石器製作址や廃棄場の存在は、原位置が記録されなければ永遠にわからないのであるから。原位置記録ということは、単に研究者的な満足であるということでは決してなく、開発によって次々と失われていく遺跡に対する必要な記録であるといいたい。

最後に、繰り返し石器集中部の研究において、微細遺物の分析や実験考古学的考察の蓄積だけでなく、集落内での「場の選択」、すなわち、集落空間の位置づけに着目すべきである。遺構間の同時性が存在するため、慎重に議論をすすめるなければならない。微視的視点だけでなく、巨視的に石器集中部をとらえる必要性があることを繰り返し主張したい。

本稿は平成8年に古代文化の編集委員の諸先生にご教示いただき、鈴木忠司氏に貴重なご指導を得ました。また、小林謙一、小金井靖、両角まり、山崎丈諸氏にはご援助いただきました。末尾ながら記して感謝いたしたいと存じます。

引用・参考文献

- (1) 概原 洋「使用痕分析から見た石器の平面分布の解釈について 座敷乱木遺跡8層上面資料をつかって」『考古学論叢Ⅱ』, 東京, 平成元年, 葛修堂
- (2) 向角まり「石器集中部の研究 山形お仲間林遺跡の石器集中部」『民俗考古 大学院論集第1号』東京, 平成4年
鎌田俊昭「動態としての先土器時代石器研究のために」『遺光器』3号, 青森, 昭和44年
- (3) 〔安藤政雄「遺跡のなかの遺物」『どるめん』15号, 東京, 昭和51年, 「先土器時代における遺跡の群集的な成り立ちと遺跡群の構造」『論集日本原史』東京, 吉川弘文館, 〕
- (4) 岡村道雄「旧石器時代遺跡の基礎的な理解について 廃棄と遺棄」『月刊考古学ジャーナル』167号, 東京, 〕
- (5) 戸沢光則「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』4巻1号, 東京, 昭和42年
- (6) 小林達雄・小田静夫他「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』10巻4号, 東京, 昭和45年
- (7) 矢島國雄「先土器時代の構造と遺跡群についての予察」『考古学研究』23巻4号, 岡山, 昭和51年
- (8) Newcomer, M. H. and G. Sieveking, Experimental Flake Scatter Patterns: A New Interpretative Technique (Journal of Field Archaeology, no73, London, 1980); Peter. M. Bower, Robson, Bonnicksenn, and David. M. hoch, Flake Dispersal Experiment; Noncultural Transformation of the Archaeological Record, (American Antiquity, vol.48, no3, 1983)
- (9) 阿子島香「ミドルレンジセオリー」『考古学論叢』, 東京, 葛修堂 1989年
- (10) 御堂島正・上本進二「遺物の水平・垂直移動 周水河期の影響に関する実験的研究」『神奈川考古』23号, 神奈川, 1987年, 「遺物の地表面移動」『旧石器考古学』37号, 京都, 1988年
- (11) 佐藤宏之「石器製作空間の実験的考古学研究（Ⅰ） 遺跡空間の機能・構造研究へのアプローチ」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅳ, 東京, 1986年
- (12) 佐藤宏之・工藤敏久「遺物形成論と遺物の移動 石器製作空間の実験考古学的研究」『古代文化』41巻, 京都, 1989年
- (13) 阿部祥人「先土器時代の微細遺物 特に小石片検出の意義について」『史学』52巻2号, 東京, 1981年; 「微細遺物」『はけうえ』東京都建設局・はけうえ遺跡調査会, 東京, 1979年
- (14) 久保田正寿「ナップ等集中部の微細石片の分布について」『白丸西の平遺跡』, 東京, 1991年
- (15) 都築恵美子「東京都練馬区愛宕下遺跡」練馬区遺跡調査会, 東京都建設局, 東京, 1990年
- (16) 山崎 丈他「神明山南遺跡」東久留米市教育委員会, 東京, 1994年
- (17) 須田英一「第4章 調査の成果と課題, 第1節 10号竪穴状遺構についての考察」『東京都町田市真光寺・広袴遺跡群Ⅵ 三矢田遺跡 遺物・考察編』鶴川第二地区遺跡調査会 東京, 1991年
- (18) 窪田恵一「4. 竪穴状遺構」『東北縦貫自動車道弘前第一（東京外かん環状道路に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書 もみじ山遺跡Ⅱ 東京外かん環状道路練馬地区遺跡（B地区鶴川第二地区遺跡調査会）発掘調査報告書 東京外かん環状道路練馬地区遺跡調査会, 東京, 1995年
- (19) 竹内俊之他『東北縦貫自動車道弘前第一（東京外かん環状道路に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書 愛宕下遺跡 東京外かん環状道路練馬地区遺跡（B地区）発掘調査報告書 東京外かん環状道路練馬地区遺跡調査会, 東京, 1995年